

第一回

平成二十六年 度

宇都宮短期大学附属中学校

入 学 試 験 問 題

国 語

注 意

- 1 「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は四〇分間です。
- 3 問題数は大きな問題が三問で、問題文は一ページから六ページまであります。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 5 「始め」の合図があったら、すぐに受験番号と氏名を解答用紙に記入してください。
- 6 試験中に質問があれば、手をあげて先生に聞いてください。
- 7 「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおいてください。

〔一〕

次の、言葉に関するそれぞれの問いに答えなさい。

問い1 次の——線部の漢字の読み方と同じものを、下のア〜エから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 興味 [ア] 人形 [イ] 競馬 [ウ] 境界 [エ] 経度
- (2) 整理 [ア] 反省 [イ] 保証 [ウ] 背景 [エ] 消火
- (3) 平等 [ア] 閉店 [イ] 兵隊 [ウ] 海辺 [エ] 病気

問い2 次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 部屋がアタタまる。
- (2) 最大のコンナンに直面する。
- (3) 安全を最ユウセンさせる。
- (4) 道をオンわる。
- (5) 人通りがタえない。

問い3 次の□の中□に適切な言葉を入れてことわざを完成させなさい。ただし、(1)は漢字一字、(2)は漢字二字とします。

- (1) □も歩けば棒ぼうに当たる
- (2) □を叩たたいて渡わたる

問い4 次の熟語の構成をあとのア〜エから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 図星 (2) 割引
- ア 音十音 イ 音十訓 ウ 訓十訓 エ 訓十音

問い5 次の——線部の敬語の種類をあとのア〜ウから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 先生からのお手紙を拝見しました。
- (2) 社長のおっしゃるとおりです。
- ア そんなけい語 イ けんじよう語 ウ ていねい語

〔二〕

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

世界史に名を残すような英雄えいゆうともなると、神話や伝説のたぐいがつきまとうものである。フランスの皇帝こうていとしてヨーロッパに一大帝国ていこくを築いたナポレオン・ボナパルト（一七六九〜一八二一）についても、さまざまな伝説が伝えられている。

（A）ナポレオンは一日に三時間しか眠ねむらなかった、という伝説がある。ほとんどの日本人がナポレオンについて「知っている」「ことのひとつであるが、はじめてこの伝説を耳にした小学生時代以来、私はその真偽まゐせに疑問を抱いだき続けていた。一日三時間の睡眠すいみんなんて、とても人間業わがざとは思えないからだ。

この伝説は、すでに明治時代に日本に広く伝えられていたようで、明治のはじめに生まれた細菌学者さいきんがくしゃの野口英世のぐちひでよ

(一八七六～一九二八)などは、若い頃、ナポレオン主義と称して、一日三時間の睡眠で猛勉強をめざしたという。野口英世の言動には多分にこれ見よがしなところがあつて、いつもナポレオン主義を通していたとは信じがたい。当のナポレオンにしても、一日に三時間しか眠らない日もあつたであろうが、いつもそうだったとは思えない。

ナポレオンの一日三時間の睡眠という伝説は、いったいどこから生まれたのか確かめてはいないが、きっと、だれか嘘の上手な伝記作家が考え出したものにちがいない。

ナポレオンは一日に七時間ほど眠り、それでも午後になると、しばしばとうとうとしていたという、側近の目撃談もある。(B)、普通の人よりも多くの睡眠を必要としていた、という説もあるくらいで、どうやら、この英雄も凡人と同じように夜は十分に寝ていたようである。ナポレオンのユニークなところは、睡眠時間の短さではなく、いつでもどこでも好きなときに眠ることができるという特技にあつた。戦場で椅子にかけたまま、砲弾の飛びかう下で眠ることができたという。

④このように、ナポレオンの一日三時間睡眠伝説は つくり話ということになるが、(C)、どんな煙のような嘘や伝説にも、⑤一片の火だねぐらいはあるものだ。この場合は、一日に十八時間も仕事をすることも珍しくない「仕事の鬼」ナポレオンがその火だねになつていようである。

ナポレオンは、みずからの仕事ぶりについてこんなふうに言っている。

「私はせつせと仕事をし、じつくり考える。私がいつもどんなことにも答え、どんなことにも直面する用意ができているように見えるのは、何か企てる前にながいあいだよく考え、どんな事態になるかを予測したからだ。⑥天分がだしぬけに現れるのではない。夕食のときでも劇場でも、いつも仕事のことを考えいつも働いている。夜も目がさめると仕事をする。私は働くために生まれついたので。」

ナポレオンが「仕事の鬼」であつたことは、同時代の多くの証言から確かなようで、「私は二時間でできることに、けつして二日もかけない」と、凡人には耳の痛いことを言うのも忘れてはいない。私はナポレオンの言葉を思いおこすたびに、その昔、会社に勤めていた頃、仕事先で聞いた「仕事をする能力とは、目の前の仕事を即座に片づける能力である」ということばを思い出し、なかなかそういう域にまで達していかないわが身を反省するばかりである。

(D)、ナポレオンの時代には、「仕事の鬼」、現代風に言えば「ワーカホリック」は時には畏敬の念ないし驚嘆の念をもって見られていたのかもしれない。なにしろ、ナポレオンの部下たちは、上司の猛烈な仕事ぶりには悲鳴をあげていたのであつて、そういう点だけ見ても、わざわざ一日三時間の睡眠などと誇張するまでもなく、ナポレオンは、同時代人の目にはユニークというか異様というか桁はずれというか、そんな形容詞をいくつ重ねても足りないような人物だったのである。

(注1) 真偽〓本当か嘘か。

(注2) 凡人〓並の人。

(注3) ユニーク〓独特。

(注4) 天分〓生まれつきの才能。

(注5) ワーカホリック〓仕事中毒者。

(注6) 畏敬〓おそれ敬うこと。

(注7) 驚嘆〓非常に驚き感心すること。

(注8) 誇張する〓おおげさに言う。

問い1 () A S D に入れる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「A また B たとえば C しかし D たぶん」
イ 「A たとえば B また C しかし D たぶん」
ウ 「A たとえば B たぶん C また D しかし」

エ 「A また B たとえば C たぶん D しかし」

問い2 ① 小学生時代以来、私はその真偽に疑問を抱き続けていた。とありますが、その「疑問」に対する答えを現在の筆者はどのように考えていますか。解答らんの「伝記作家が〜」に続くように、本文中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

問い3 ② 野口英世の言動には多分にこれ見よがしなところがあって、とありますが、これはどのような意味ですか。最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 野口英世の言動には、後の人々のつくったわざとらしい話もたくさんあるので、

イ 野口英世の言動には、「ほら見たことか」と言われるような失敗もかなりあるので、

ウ 野口英世の言動の中には、大目に見てあげなくてはならないような嘘もかなりあるので、

エ 野口英世の言動の多くは、得意になって見せつけるような面があるので、

問い4 ③ 凡人とありますが、その例として挙げられているのはだれですか。本文中から二つ探し、三字と十字で書きぬきなさい。

問い5 ④ この文章は、このように、から大きく二つに分かれます。「ナポレオン」は、ここより前の部分では何の具体例として挙げられていますか。解答らんの「〜という例」に続くように、本文中から三十九字で探し、最初と最後の三字を書きぬきなさい。(、や。などの記号も字数に数える。)

問い6 にあてはまるものとして、適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 歯が立たない

イ 柄にもない

ウ 首が回らない

エ 根も葉もない

オ 手も足も出ない

カ 足が地につかない

問い7 ⑤ 一片の火だねとは何ですか。本文中から十八字で探し、書きぬきなさい。(、や。などの記号も字数に数える。)

問い8 ⑥ 凡人には耳の痛いこととありますが、その説明として最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 仕事を手早く処理するほうがいいと分かってはいても、それだけの能力がない人にとっては、弱点をつかれて
いるようで聞くのがつらい話

イ 自分と同じように仕事を早くこなす能力を要求するような、無能な部下にとってはおしつけがましく聞こえる
指示

ウ 英雄と呼ばれるくらい業績を残す人間は、他の人の何倍ものスピードで仕事をこなせるのだという、凡人に
とっては聞くのが疲れる自慢

エ 多少雑になったとしても、手際よく仕事をこなすことを一番に考えている人にとっては、聞いていて納得のい
かない考え方

問い9 次のそれぞれの文について、本文で筆者が言っている内容と合っているものには「○」を、合わないものには「×」をつけなさい。

「×」をつけなさい。

ア 英雄には神話や伝説がつきものだが、ナポレオンの場合、一日三時間睡眠伝説などなくても、当時の人々には並はずれた人物ととらえられていたのである。

イ 現代でも「ワーカホリック」と呼ばれていやがられているのと同様に、ナポレオンの時代にも仕事のし過ぎは敬遠されていたことが伝説から読み取れる。

ウ 現代に生きる我々も、ナポレオンの優れた仕事術を見習い、どんなことに直面しても対処できるように日頃からしっかりと準備をしておくことが大切である。

エ 英雄に関する神話や伝説のたぐいは、同時代の凡人の目には桁はずれな英雄たちの行動をおおげさに書きあらわしたものである。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校四年生になった「昇平」と「草太」は校区外に子供だけで行けるようになる。そして、進級祝いに新しい自転車を買ってもらえることになった。

① 楽しみで待ちきれなかったのか、昇平は自転車店でもらったカタログをランドセルに入れて持ってきていた。他の友達よりもいい自転車を買ってもらえるのがうれしいうで、カタログを指さしながらその自転車機能についてあれこれしゃべっている。草太にもその気持ちは分からなくもなかった。これまで昇平が乗っていた自転車は、従兄のお下がりだったり前輪だけ草太のお古だったり、あまり見栄えがしないものばかりだったのだ。ようやく新品を買ってもらえるとなれば喜びもひとしおなのだろう。他の友達の変速機能は五段切り替えが主流だったし、電池の力で開閉するリトラクタブルライトもまだ珍しかった。いわば昇平の新車は、みんなが憧れるような要素を全て備えたマシンだったのだ。他の者だったら、昇平の新しい自転車をさぞ羨ましく思ったことだろう。しかし草太の中にはそんな気持ちは全くわいてこなかった。草太にとっては、多くの仕掛けがついたものより自分の注文した自転車の方がずっと格好いいものだったのである。

「ソータのはどんなやつなんだ？」【 I 】

一通り自分の自転車についてしゃべった後、昇平は思いついたように尋ねてきた。

草太はカタログのページをめくった。メーカーが違うので全く同じものは載っていないかったが、よく似た車種のページはすぐ見つかった。

「俺のは、サイクリング車」

③ なるべくあっさりと言ったつもりが、ちよつと自慢げな声になってしまった。カタログ写真のいかにも速そうなおトロッポハンドルの自転車を指してみせる。

「……なんか、大人の乗るやつみたいだな」

昇平が意外そうに言った。きっと考えてもいなかった車種なのだろう。

「浅川の土手とかで見かけるやつだよ、これ？」

草太は強く頷いた。まさにそのサイクリングロードで、草太はこういう自転車に憧れるようになったのだ。

一緒に特訓山へと冒険して以来、二人は度々校則を破っては校区外に遊びに行っていた。大人に見つかって怒られ

たことも何度かあったが、川原や特訓山などの遊び場の誘惑には勝てなかったのだ。

やがて、草太は土手の道をとんでもない速さで走っていく自転車に心ひかれるようになっていった。乗っているのは大人や学生風の若者ばかりだったが、子供用のものもあると知ってすぐに欲しくなったのである。

「スピード出していっぱい走るには、こういうのが一番なんだってさ」

草太が言うと、昇平の横顔にちよつと複雑な表情が浮かんだ。スピードが出ると聞いて羨ましくなったのかもしれないし、カタログに載っているその自転車の値段を見て引け目を感じたのかもしれない。

「スーパーカーライトはついてないけどね」

昇平が黙ってしまったので、草太は慌てて付け加えた。そして話題を変えようと、新しい自転車が届いたらどこに行こうかと尋ねてみたのだった。

「やっぱり、浅川の土手でぶっ飛ばすのが一番かな」【Ⅱ】

昇平もすぐに笑顔に戻った。草太もそれでほつとして、前から考えていたことを口にしたのである。

「新しい自転車で、海まで走ってみようぜ」

風ヶ丘だけでなく浅川や特訓山も遊び場にしてた一人には、既に校区外に出ることくらい何でもなくなっていた。

四年生になって自由に校区外まで遊びに行けるようになったとはいっても、それくらいではちつとも面白くない。走れるだけ走り、自転車では行ったこともないくらい遠くまで行ってみるといのが草太の思いついた計画なのだった。なにしろ県道沿いに走っていくだけでいいのだ。途中で国道や線路にぶつかるが、そのすぐ先が海である。砂浜の近くには海沿いの道も通っているし、新しい自転車で海岸線を走ったら気分は最高だろうと思った。

「朝から出発すれば行ってくると思うんだ。おにぎりとか持っていけば、海で食べられるしさ」

⑤ そんな提案に、昇平が乗ってこないわけではない。新たな冒険の予感に目を輝かせて身を乗り出した。

「よし、じゃ、いつ行く?」

実行する日は四月最後の日曜日と決まった。その頃までには新しい自転車も届いているだろうし、二人も充分に乗り慣れているはずだ。どのくらい時間がかかるかは分からないけど、朝から出かければ日が暮れるまでに帰ってこれるだろう。今度は親に隠れて行く必要もないので、それぞれ母親に頼んで弁当を作ってもらおうということになった。計画がまとまると、昇平はまじまじと草太の顔を眺めてきた。戸惑う草太の目を覗き込み、笑顔で声を上げる。

「ソータって、すげえな」【Ⅲ】

「えっ?」

「いつもはあんまりしゃべんないくせに、実はすげえこと考えてたんだな!」

照れくさくなるくらいのも、手放しの賛辞だった。友達からそんな風に讃えられたのは、草太にとって初めての経験だった。

「——前から、思ってたんだ」

⑥ 草太は照れ隠しに呟いた。何か言わずにはいられなくて、ほとんど無意識に口走っていた。

「自転車で、どこまで行けるか試してみたいって」

「どこまでって……」

「初めて行った時は、浅川も特訓山もすごく遠くって感じだったろ?」

「恐かったよな、道に迷ったりして」【Ⅳ】

——あの時の冒険は、今まで二人だけの秘密にしていた。

見知らぬ団地の中を泣きそうな気分で走り回った記憶は、今も草太の中に鮮やかに残っている。校則を破った時の胸の高鳴りや帰り道を見つけた時のうれしさを、昨日のことみたいに覚えていた。

(注1) リトラクタブルライトⅡ動かすことのできる自転車の照明。

(竹内真「自転車少年記」から)

(注2) ドロップハンドルⅡ競輪用自転車の取っ手。

問い1 昇平は自転車店でもらったカタログをランドセルに入れて持ってきていた。とありますが、「昇平」はなぜ「カタログ」を「持ってきていた」のですか。それを説明した次の文の [] が、ア～ウに入る言葉を、それぞれ本文中から書きぬきなさい。ただし、アは六字、イは三字、ウは二字とします。

[ア] がっているみんなが [イ] ような [ウ] の自転車を買ってもらえるから。

問い2 ② 自分の注文した自転車がずっと格好いいものだったとありますが、「草太」の考える「格好いい」自転車とはどのようなものですか。本文中から二十字で書きぬきなさい。

問い3 ③ ちょっと自慢げな声になってしまった。とありますが、この時の「草太」の様子として最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア サイクリング車でない「昇平」の自転車をばかにしている様子

イ 聞きたくもない「昇平」の自転車の話の後に、やっと自分の話ができうれしい様子

ウ 自分が願っていたとおりの速く走れる自転車を手に入れた満足感が思わず出ってしまった様子

エ スピードの出る大人用の自転車を乗りこなして自信をつけた様子

問い4 ④ 昇平の横顔にちょっと複雑な表情が浮かんだ。とありますが、この時の「昇平」の様子として最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 「草太」の自転車がすごく速いと知らされて、もっと慎重に選ぶべきだったと後悔する様子

イ 自分の自転車が一番だと疑いもなかった自信がなくなりつつある様子

ウ 「草太」と自転車の性能を競い合うことになり、自分の自転車が負けると不安になる様子

エ 自転車を手に入れて喜んでいる「草太」の単純さに友人として恥ずかしくなる様子

問い5 ⑤ そんな提案とありますが、その内容を表した部分を解答らんの「〜こと」に続くように、本文中から三十三字で探し、最初と最後の五字を書きぬきなさい。(、や。などの記号も字数に数える。)

問い6 ⑥ 草太は照れ隠しに呟いた。とありますが、「草太」が照れた理由が書かれた二十五字以上の一文を本文中から探し、最初の五字を書きぬきなさい。(、や。などの記号も字数に数える。)

問い7 次の文は【Ⅰ】〜【Ⅳ】のどこに入りますか。Ⅰ〜Ⅳの記号で答えなさい。
昇平は同意を求めるように笑いかけた。